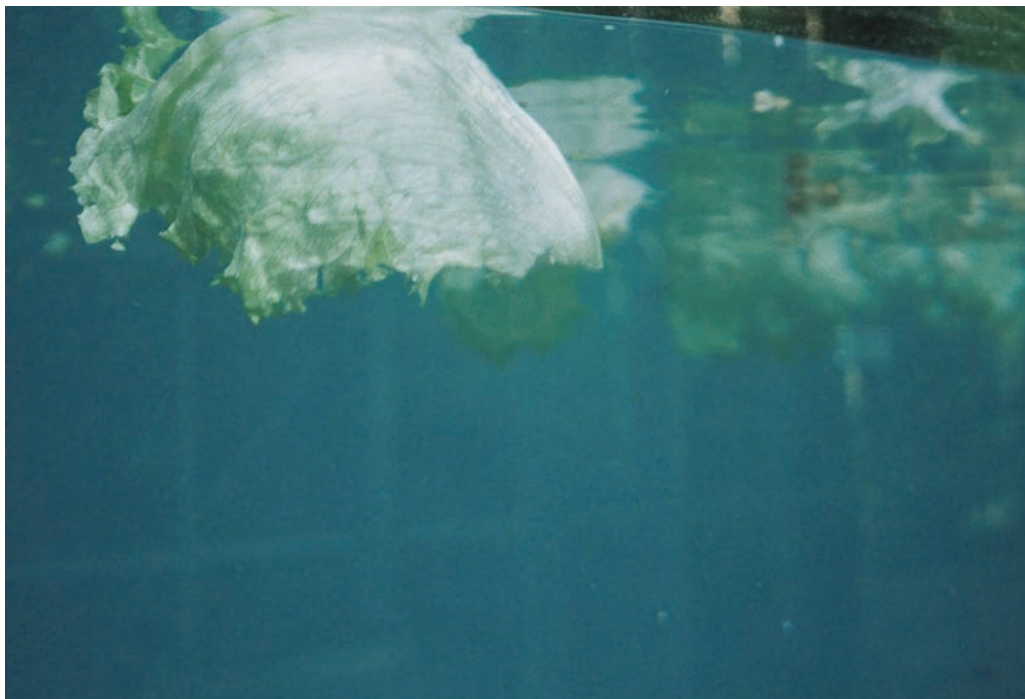


海と玉ねぎ

中島里菜



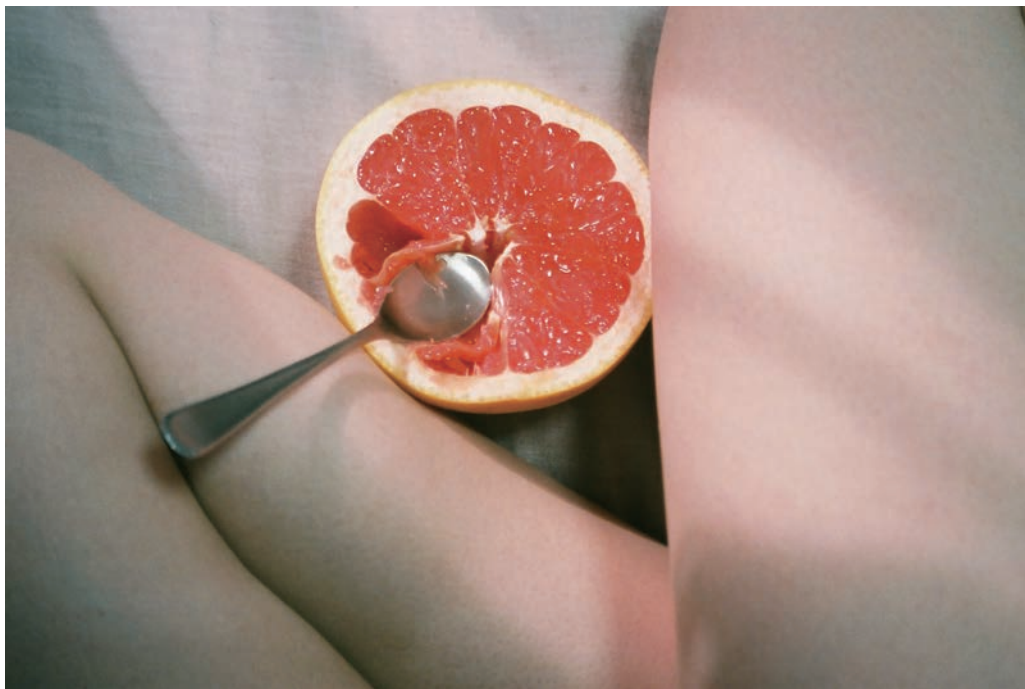
























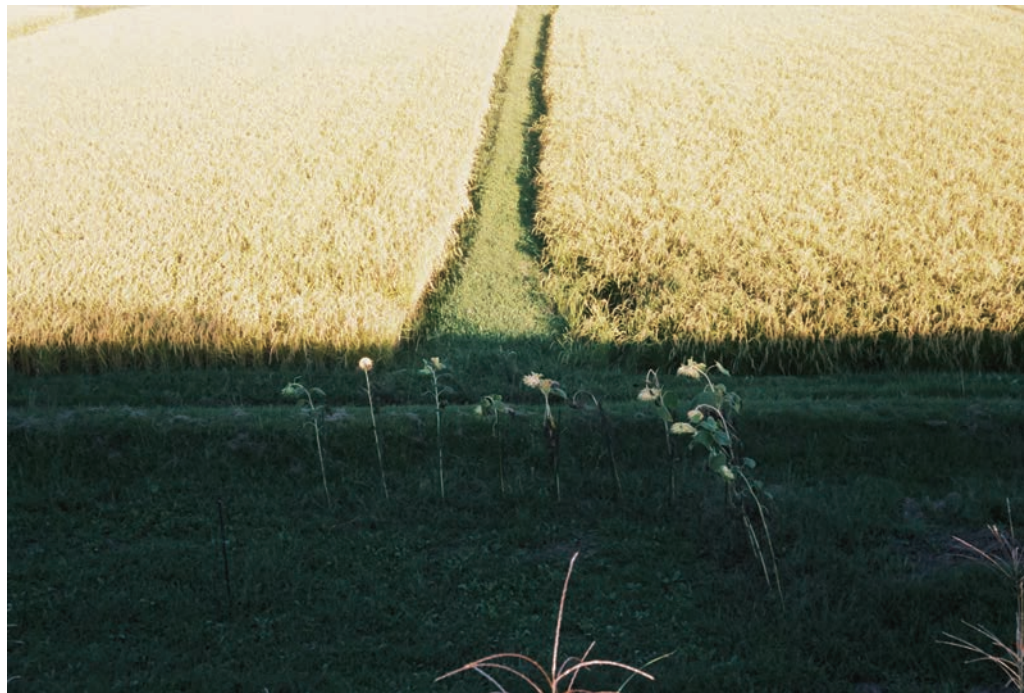






















































物心ついた頃から、絵を描くのが好きだった。

少女漫画を真似した、不自然に瞳の大きなお姫さま。

指を描くのが苦手だったから、絵のお姫さまはいつもみんな後ろで腕を組んでいた。

小学生になっても中学生になっても飽きもせず女の子の絵を描いていた。

ある日、父が「デザインの学校で使っていたんだ。」と、使い古しの消しゴムをくれた。

ステッドラーの消しゴム。

みんなが使ってた消しゴムとはまた違い、使い心地が良く、なによりこの外国らしいデザインが特別な気がして大好きだった。

思い返せば、消しゴムの最後の最後、なくなるまで見届けることはなかった。

気づいたらどこかへ転がってしまっ、そうしたら何の疑問も抱かず新しいものを買っていた。

それでもステッドラーの消しゴムだけは、小さくて消しづらくなっても、摩擦で爪が熱くなって不快でも使い続けた。

中学三年生の終わりに散りぢりになって使えなくなってしまった。

そうして使うのは諦めたけれど、まるでお守りのようにずっと筆箱に入れていた。

今はもうステッドラーの消しゴムがどこにあるのかわからない。

あんなに大切にしていたことも今日ですっかり忘れていた。

日々はあっという間に過ぎ去ってしまう。

私の日々には、あのひとみみたいなサクセスストーリーも、あのひとみみたいな悲劇もなく、ドラマチックなことなんてなかった。

それでも世界は回っていて、確実に何かが変わっていく。

私の日々にもなにかが起こっていて、いつの日かそれに気がつくのかもしれない。

今なんとなく過ごしている瞬間は尊く、いつの日にか、いつかの宝物になるのかもしれない。

